

ローマの信徒への手紙 3:21～26

「神の御許にこそ平安がある」

2022年11月6日(主の日)

本日は召天者記念礼拝ということで、これまでこの藤沢北教会で教会生活を過ごし、地上の人生を終えた信仰の先輩たち、家族のことを思い起こしつつ礼拝をしています。のちほど、昨年から1年の間に主の御許に送った教会員を加えました、召天者名簿でお名前を読み上げます。故人のことを思い起こすためです。けれども、この礼拝は亡くなった人たちを拝むものではありません。ましてやここに一時魂のようなものが戻ってくる、というようなことを考えているわけでもありません。藤沢北教会での葬儀に際してわたしが必ずお伝えしていることがあります。教会の葬儀とは礼拝です。亡くなった故人に命を与え、恵みのうちに地上を活かし、そして地上から命を取り去られながらも、永遠の命を約束してくださる神へのひたすらな礼拝なのです。この教会で葬儀をなさったご遺族の方は覚えておられるかもしれません。全く同じように、この召天者記念礼拝も、あくまでも礼拝です。礼拝という以上、どのような名前がついていたとしても、神を賛美する、そのことにつきまします、ですからここでわたしたちは、神を拝み、神を賛美しているのです。であれば今わたしたちは、亡くなった家族を思いながら礼拝するとはどういうことかと思えます。つまり、主の御許に召されている故人のこと、そして礼拝をしているその主、神であり救い主であるイエス・キリストのこと、そして私達自身のことを考えたいと思えます。

まず、地上の人生を終えた家族、信仰の友のことです。わたしたちはこの先に召された家族や友が神のみもとで安らぎを得ている。平安のうちに休んでいる、と信じています。信仰に生きたわたしたちの家族は今、神に委ねられました。わたしたちは、安心し、信頼してすべてを神におまかせできるのです。実は、わたしも3週間前に父を亡くしました。ち地はキリスト者家庭に生まれ、46年牧師をしました。最後の半年は、このコロナ禍でほとんど誰にも会えずに入院生活をしていました。幸い携帯電話で話すことはできましたので、毎日のように電話をするようになりました。その中で、よく心配事が頭に浮かんだようで、いろいろ話そうとしていました。父は8年前に患った脳出血の後遺症と入院中の一時的な認知症のような症状、せん妄によって、なかなかうまく話ができませんでした。それにもかかわらず、だれだれはどうしている？とか、事務的なこと、お金のこと、などの心配をするのです。けれども、うまく説明できない。「あのことか？このことか？」とわたしが推測して答えてもなかなかわからないのです。実際は、お金の管理はわたしがしていたこともあり、どうしてもやらないといけないことはないと思ったり、ある時「い

いろいろな心配はあるかもしれないけれど、すべて神様に委ねれば大丈夫だよ」と言った時、「そうだな。それしかないね。」と安心したことがありました。この地上を生きるわたしたちは、やらないといけないことがあります。さまざまな心配があります。自分の体も弱く、病気になり、苦しいこともあります。明らかにできずにあいまいなままになっていることがあります。しかし、今、主のみもとに召された人たちは、そのような心配はないのです。主がすべてをうけとめ、平安においてくださるからです。生物として死んだので、体はもうないので、そのような生きる苦勞はないのだ、と言う人もいるかもしれませんが、そうではありません。もし生物として死んだというだけなら、平安もなにもないはずで、葬る必要もないし、こうして思い起こす必要もない。悲しむことだっておかしなことだ、ということになります。けれども、現実はそのようなものではないのです。わたしたちは、生きていた時も、神様にゆだねて平安を得ることができるといふ信仰が与えられているのは本当に幸いなことだ、と父の姿をみて思いました。そして、死に際しても、わたしたちは神の平安のもとに置かれていると信じるのであります。

そこで、神について、平安ということをもとに考えたと思います。聖書がいう平安、という言葉には多くの意味があります。心が乱されない、というだけでなく、争いがない状態、病気がなくて健康である、そういう意味があります。その中で最も大切なのは、神との関係がよいものである、ということです。聖書に描かれる人間は、神との間に平安を得ることを一番の問題にしました。神との間に平安がない現実を生きていたからです。神に造られ、愛されていたはずの人間は、神などいなくても自分ひとりで生きていけると、傲慢にも神を裏切り、自分勝手にその御許から出ていってしまいました。話を単純にして言うと、人間関係に悩み、病気に苦しみ死を恐れ、自然災害に苦しむのは、このように神との間の平安を失ったからです。この神から離れた状態を罪といいます。そして、神との平安の関係に戻らせてもらうことを「義とする」と言います。正義の義です。神とのまことの正しい関係に戻るといふことです。本日の聖書箇所でも語られていることです。亡くなった家族は、主の御許に召されている、平安のうちに置かれていると信じることは、すなわち神が罪の状態にあった人を救い出して、罪を赦し、神とのほんとうにあるべき関係に戻してくださった、ということです。神の御許には、苦しみも、悲しみも、涙もありません。この平安は決して失われず、永遠に続きます。神の御許にこそまことの平安があるのです。わたしたちの家族は、今、この神の平安の中にいるのです。

この神に義とされ、平安のうちに入れられるのは、どのようにしてか、と本日のこの聖書の書物、ローマの信徒への手紙を書いたパウロは語ります。どのようにすればわたしたちが神に義とされるのか、平安を得られるのか、というのがキリスト教会の信仰の最も大

切なことがらの一つですが、このローマの信徒への手紙は、そのことをつきつめて考えた書物です。そして本日の箇所は、わたしたちの信仰の真髓が記されている箇所の一つです。「人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。」罪によって神との関係を見失い、神の栄光を失ってしまった人間は、困難と不安の中を生きなければならず、また最後には死ななくてはならない定めにあります。しかし、キリスト・イエスが贖ってくださった、つまり、罪から助け出してくださったこのことによって、わたしたちは義とされるのです。どうして主イエスはそんなことをしてくれたのか？それが神の恵みだからです。神からはなれているのであれば、わたしたちは、義とされることはありません。いくら立派な人間であったり、敬虔な信仰を持っていても、神の御前で自分は正しい、間違ったことを一つもしていない、心から反省しました、などと申し開きができる人は一人もいません。神と同じように正しい人などいないからです。人生の歩みの中で、自分の思い通りにいかないことが何度もあり、人間関係に苦しむ中で人を憎み、また過ちを犯します。わたしたちが救われるとするならば、ただ神の方からわたしたちに救いの手を差し伸べてくださるしかないのです。その差し伸べられた手を握りかえすならば、生きている間も罪の赦しを信じて神との関係を回復していただいて義とされ、平安のうちに歩みます。先に召された人たちが平安のうちにあると信じるならば、今生きているわたしたちも、この神の恵みを受け入れて同じ平安の中を生きることができるようです。

リハビリ病院に入院していた父は先月 10 月 10 日の夕方に急に容態が悪くなり、救急病院に移されました。幸い少し持ち直し、そこから一週間、最初は会話もでき、弱ってきても呼びかけに目を合わせたり、声を出すなどの反応がある中過ごすことができました。その間にわたしたち 4 人の子供、孫、親類に会うことができました。その間に、わたしも覚悟を決め、「もうすぐイエス様のところへ行くんだよ。だから、安心してね」と何度か呼びかけました。自分で言うとおいて思ったのは、それはつまり主イエスのみ前で罪が赦されることだ、と。いいなあ、と。羨ましくも思ったのです。終わりの日に主イエスのみ前に立たされ、裁きを受けます。しかし、そこではすべての罪が赦されるのです。そのように、今から信じることができるとはなんと幸いで安心なことか、と思わされたのです。

それほど深い話をする親子ではありませんで、わたしの方には、家族のことなどいろいろなことについて、どうであったか、聞きたいとおもっていたことがいくつかありました。詳しくはここでは控えますが、私の中であきらかにしておきたかった、もやもやしたものが残っていたのは確かです。普通は、死んだ人の生前の罪をあれこれ言わないのが常識で

すが、しかし、それは言わないだけであって、わだかまりが残っていることもあると思うのです。しかし、それでは残された人間が背負わなくてはいけないことになってしまいます。あの人もいろいろあったけれど、もう何も言うまいと傷を抱え込んだままでいなければならぬのか。それとも、死んだからといって自分は許さないと心に恨みをもっていきっていくのか。しかしいずれにしてもそれは自分がその人の人生を、死の意味を決めるということになってしまうわけで、それは恐ろしいことです。だからこそ、わたしたちは手放さなければならない。神の御許に委ねるとは、そういう意味でも大切なことです。そして、そこには赦しがともなわなくてはなりません。自分の気持ちの中での赦す・赦さないを超えて、イエス・キリストによってすべてが赦される、とパウロは語ります。このことの意義は大きいと思うのです。赦すというのは気持ちの問題ではないのです。個人的なことではありません。すべての者がこの赦しに招かれている。パウロは、「人は皆、・・・神の栄光を受けられなくなっていますが、キリスト・イエスを通して、神の恵みにより、無償で義とされるのです」と語ります。「人は皆」は栄光を受けられなくなっている、という言葉と、無償で義とされるのです、の両方の主語です。誰もがこの恵みに招かれています。亡くなった人たちの罪は神がお赦しになりました。だから、わたしたちも赦さなければなりません。わたしたちはそのことを信じ、故人とともにいてくださる神をほめたたえる、そのような礼拝をお奉げしているのです。

本日、その名を呼んで覚えている先に召された人たちは、生きていた時からこのイエス・キリストを信じ、神の恵みを受け入れて人生を歩きました。人生がよい人生であったと振り返ることができたか、それはわかりません。しかし、よい人生だったと満足することがわたしたちの人生の目的ではないのです。たとえ苦しい終わり方であっても、突然であっても、理不尽であっても、大きな罪、いえ小さい罪を犯したとしても、最後には赦される、このことを恵みとして生きたはずで、わたしたちはしんじます。今は召された人たちが、信仰を持って歩み、今は主の御許に平安のうちに置かれていると。わたしたちも同じ恵みに招かれています。まだしばらく地上を歩むようにと定められているわたしたちも、この恵みの中にあってこそ希望を持って歩み続けることができます。